

平成22年度中学生・高校生の国際理解・国際交流論文
中学校の部最優秀賞



「橋」を架ける

いわき市立平第一中学校
3年 大和田 景子

「無償の罪深さ」を考えた人がいる。彼が最初に言ったのか、誰かの言葉の引用なのかはわからないが、スーダンで医療活動に従事している川原尚行医師が、その人である。

ここで言う無償とは、もちろん海外支援に対してのものを指している。なぜ、それが罪深いのか。返済義務を負わず、無償で提供してくれるのであれば、その国にとってこんなうれしいことはないはずなのに。私は、恵まれない国への無償援助というのは仕方がないことであり、当たり前だと思っていた。その国の経済が成り立たなかつたら、先進国として安定するまで面倒をみるべきだと単純に考えていたのである。

しかし、直接現場で支援している側の考えは全く違っていたのだ。彼は無料にして寄付で賄う方法をとらず、あえて有料の診療所をスーダンで運営している。「お金持ちの日本からドクターが来てくれる」となると、彼がいなくなれば、たちまち診療所は廃墟になってしまう。無償の支援は半永久的でないし、その国の自立を鈍らせ、そして遅らせていくというわけだ。

スーダン人の医師や看護師を雇って診察を任せ、同じ国でも民族が違い、首都と地方の意識の差を埋めることを常に考えながら医療者と村人の「橋渡し」をするのが自分の仕事であることに、彼は日々やりがいを感じている。

なぜ、ここまで他国のためにできるのだろうか。そう考えた時、私が2年前の校内弁論大会で訴えた「1枚のビスケット」を思い出した。それは新聞の、ほんの片隅に載せられた広告だった。

－ 1枚のビスケットが、未来へのチケットになる －

このキャッチフレーズには、どんな大きな社会面の見出しよりも強く引きつけられたことを覚えている。WFPって何？1枚のビスケットが給食ってどういうこと？真新しくて珍しい内容に、当時は目が釘付けになった。学校給食で世界の教育を支援するというWFP（国連世界食糧計画）。おそらく教科書では習わないこの名称に胸踊らせた。たった1枚の小さなビスケットが、給食として配給されることによって、少しでも空腹を満たし、勉強して、その国の将来を背負う子どもたちの夢をふくらませる環境を作る構図は、その国の自立を明らかに視野に入れたものである。給食がビスケット、そこから夢が広がるという発想にひたすら感心した。高タンパク高カロリー。量は少しでも、質の良い栄養がきちんと詰まったビスケットは、保存性にも優れ、次々と陸送されたり海を渡ったりしたに違いない。それを想像するだけでわくわくした。

今回、私の中で瞬間、川原さんとWFPの活動が重なった。どちらも目先のことではなく、何年か後の成果を念頭に入れているのだ。夢を持った子どもたちが国の力となるまでの期間と、自国の技術と人材だけで安定した医療活動ができるようになるまでの期間、つまり、実を結ぶまでの過程を大切に育てている。その期間を助けることこそが、本来あるべき支援の形なのではないかと気づいた。支援とは丸ごとではなく、未来の夢が見えてくるように導く、ほんの少しの手助けなのではないか。私は、この二つの、未来型支援にかける想いを、今ならそう理解できるのだ。

川原さんは外務省を辞め、国際NGO「ロシナンテス」代表となって、日本から医師や検査技師を招いたり、反対にスーダンの医師を日本に連れて行ったり、日本との「橋渡し」も繰り返している。また、日本の学生をスーダンに誘うこともある。豊かな日本で、若者は目標を探していると思うからだそう。思い切ってスーダンに渡り、それを入口にして、学生たちが世界を知り、振り返って日本について考え、そして日本や故郷のために動ける人間に育ってほしいと願い、「橋渡し」を続ける彼の意気込みに、朝河貫一博士に通ずるものがあるのではないかと感じた。日米開戦を避けてほしい、戦争の悲惨さに気付いてほしいと、必死で両国を行き来した博士の姿に重なるのである。博士の「日本の架け橋」と、川原さんの「スーダンからの橋渡し」。時代と活動の場は違っても、外国において日本人としての誇りを持ち、自分の役割をしっかりと見極め、信念を持って突き進んでいるところが、はっきりと共通する。この二人に迷いという文字は一切感じられない。

自分と違う人種に不安はなかったのだろうか。知らない国に根づく意味はあるのだろうか。生き様も、考え方も十人十色。全ての人に当てはまる答えなんてないだろう。しかし、この地球のどこかで助けを求める人が存在する限り、あらゆる国への日本人の支援は止まることなく、むしろ今も絶え間なく続けられている。

さて、私はどうだろうかと振り返った時、自分の何とちっぽけなことかと思知らされる。先人の勇気と行動力。そこから培ったノウハウを生かすことこそ、今、求められる本当の意味での国際支援につながっていくような気がする。その形を作り出す。それがこれから社会の一員となっていく私たちの務めなのだ。争うことのない平和な世の中と、貧しさで命を落とす不幸をなくすために。私もその一端を担うことができれば、どんなに素晴らしいだろう。私の未来の夢は今、海を越えてあふれそうである。平和慣れした日本を飛び出し、いつか私も、海外で人のために動ける人間でありたい。